

増田渉の直筆図解による魯迅作品についての発見

東 延 欣

Rediscovery of Lu Xun's works by Wataru Masuda's hand-drawn diagram

Dong Yanxin

During the 10 months from March 20, 1931 to the end of December of the same year, Wataru Masuda received personal guidance from Lu Xun at Lu Xun's house. Many hand-writing notes are left in *Nahan* and *Panghuang* published in 1930, which was used as a textbook when Wataru Masuda received personal guidance from Lu Xun. It can be seen that Masuda often used figures when asking Lu Xun about the unclear points of the novel. It is probable that these hand-drawn diagram were approved by Lu Xun himself. This paper focuses on two problems: the illustration problem about gambling in *The True Story of Ah Q*, and the illustration problem of the true identity of the shellfish "Guijianpa" and "Guanyinshou" in *Guxiang*.

keyword: Masuda Wataru, Lu Xun, manuscript, *Guxiang*, *The True Story of Ah Q*

キーワード：増田渉 魯迅 直筆資料 「故郷」 「阿Q正伝」

はじめに

周知のとおり、1931年3月、増田渉は佐藤春夫に書いてもらった内山完造への「紹介状」のことで、上海に渡航した。1931年3月20日から、同年12月末までの10か月の間に、増田渉は魯迅宅で魯迅から個人指導を受けた。増田渉が魯迅から個人指導を受けた際に、教科書として使用した1930年刊北新書局から出版された烏合叢書版『呐喊』や『彷徨』に多くの注釈メモが残されている¹⁾。このような増田渉の直筆文献と言え、魯迅と増田渉との間で交わされた往復書簡集など多数の先行研究が存在する。例えば、1978年から1986年まで北京図書館出版社から続々と出版された『魯迅手稿全集』である。『魯迅手稿全集』の内容は文稿、書信、日記3つの部分に分けており、すべては魯迅の手書き原稿のままに撮影か影印されている。また、日本で最も有名なものは1986年に汲古書院から出版された伊藤漱平と中島利郎共編『魯迅・増田渉師弟答問集』²⁾である。『魯迅・増田渉師弟答問集』に収録されているものは、増田渉

1) 本論文を作成する際に使用した直筆資料は、全て関西大学図書館の「増田渉文庫」に所蔵されている未公開の資料である。

2) 伊藤漱平・中島利郎編、(『魯迅増田渉師弟答問集』、汲古書院、1986年)。

が『中国小説史略』を翻訳するため、日本へ帰国した後すぐに魯迅と不明なところに関する質問をめぐる往復書簡である。その内容について、井上泰山（2012）によると、「増田の質問と魯迅の返答とがそれぞれ黒色と赤色の二色に区別されて印刷されているため、問答の様子が大変分かり易くなっている。」³⁾ それらの手紙もそのまま影印されており、隣に編集者である伊藤漱平と中島利郎の解説がついてある。『魯迅・増田渉師弟答問集』によって、増田の習慣を鮮明に理解できる。それによれば、増田が小説の内容について不明な箇所を魯迅に質問する際、図解を用いていたことがあることがわかる。増田は簡単な絵を描いて小説の情景を表すことに長けていた。よって、『呐喊』および『彷徨』の中に残されている増田のメモでも、同様に図解を用いて説明している箇所が多く見られる。本稿は、「阿Q正伝」に残された賭博についての図解と「故郷」にある「鬼見怕」と「観音手」という貝の正体の図解、異常の2つの問題を中心に検討していく。

一、増田渉の直筆メモにある図解の紹介

「故郷」の中の図解を例に挙げると、「狗氣殺」というものを解釈するために、図1の上端に絵が残っている。ここの原文は「楊二嫂發見了這件事，自己很以為功，便拿了那狗氣殺（這是我們這里養雞的器具，木盤上面有着柵欄，內盛食料，雞可以伸進頸子去啄，狗却不能，只能看着气死（これは魯迅の郷里の養鶏の道具で、木の板の上に柵がとりつけてあって、そのなかに食料を盛って置くと、鶏は首を伸ばして中の食べ物をつついて食べることはできるが、犬には出来ないので、ただ見てじれるばかりだ。)), 飛也似的跑了。」になっている。原文には、「狗氣殺」の次に注釈が入っている。増田渉は魯迅の幼い頃の記憶に残るものを絵でいきいきと表現していた。そして、1961年に角川文庫から出版された増田訳の「故郷」で、「狗氣殺」は「犬殺し」となっている。

3) 井上泰山、「増田渉と辛島驍：『中国小説史略』の翻訳をめぐって」（関西大学東西学術研究所紀要、2012年4月）。

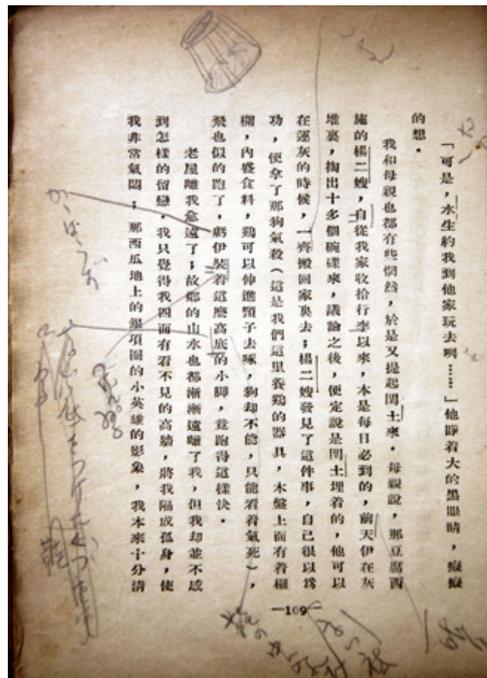


図1

そして、増田渉は図2のような絵で「兔和猫」の中にある「後進院子」という言葉を説明している。原文は「住在我們後進院子裡的三太太，…」。この図解は当時の中国の「院子」の構造を非常に的確に描いており、文字のみの注釈メモより、「後進院子」の意味が更に分かりやすくなっている。

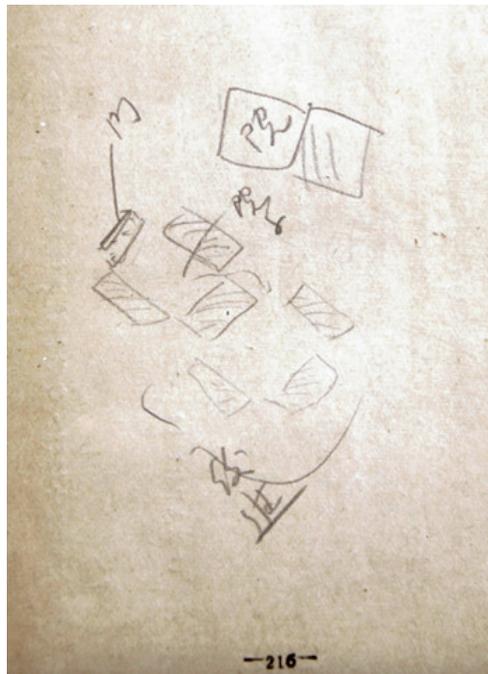


図2

また、「院子」と同じような昔の家の構造に関して、「肥皂」の中の「廂房」についての図解もある。図3によって、原文「引着道統走進西邊的廂房裡，…」のところに「西の部屋」という注釈メモが書いてある。左上に増田は図解を描き、「廂房」を説明している。非常に簡単な絵であるが、一見するだけで、「廂房」ということが明確に理解できる。また、1935年に岩波文庫から出版された『魯迅選集』に、この部分に対する増田訳は当時のメモを参考し、「道統を案内しながら西の部屋へ行った、…」になっている。

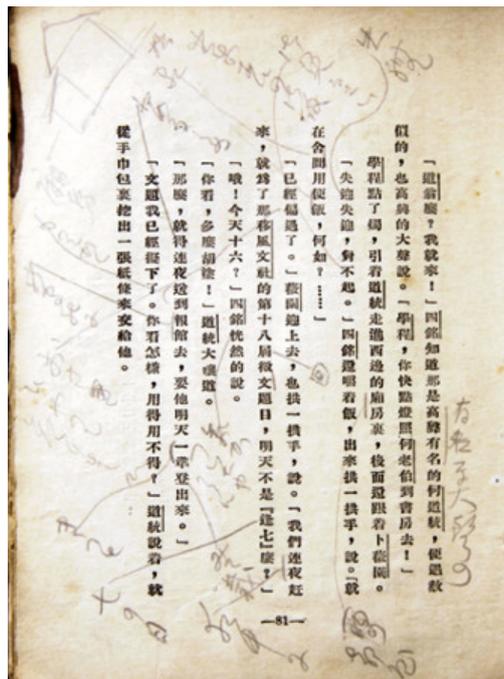


図3

「離婚」では、「七大人也將小烏龜頭拔下，…」という文章の隣に、増田渉は「煙草の栓を」と注釈している。(図4) 同じページの左上に、原文の「小烏龜」というもの、即ち昔の中国の煙草入れである「鼻煙壺」の絵が描かれてある。

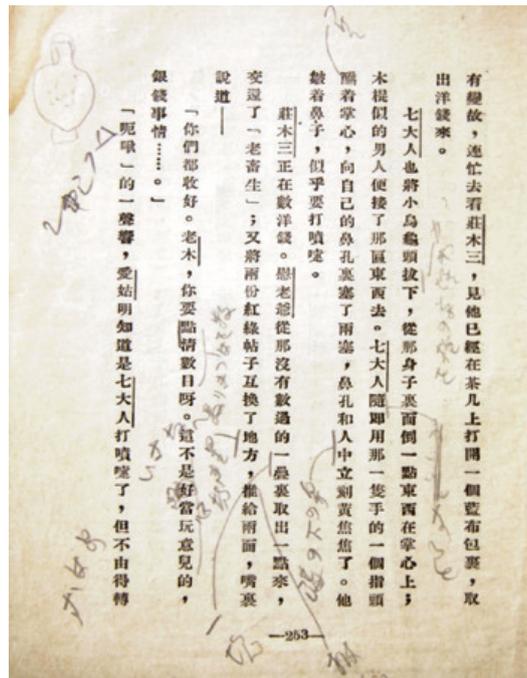


図4

このような小さい図解は他にもいろいろあるが、例えば「阿Q正伝」の中に「氈帽」（図5）、「照壁」（図6）などがある。

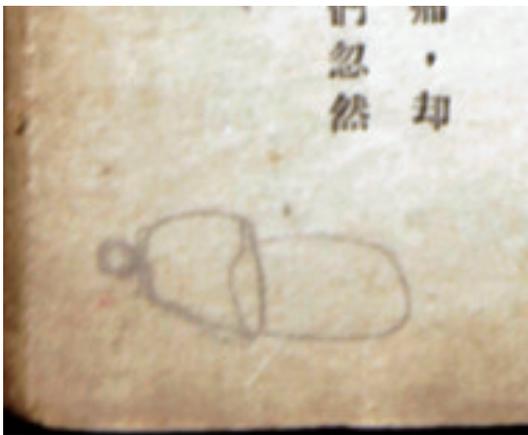


図5

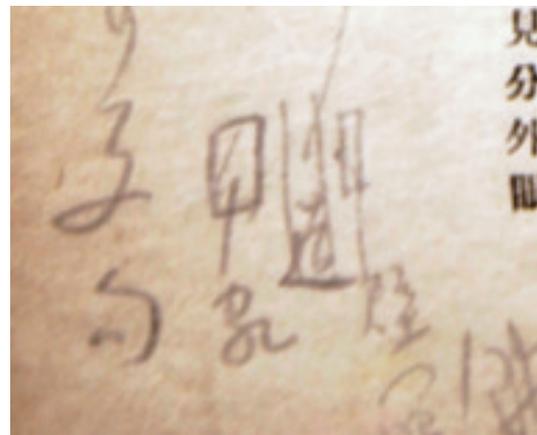


図6

それらの図解を見ることで、日本人としての増田渉はより正確に魯迅の小説を理解できたと考えられる。さらに、我々もそれらの図解を通して、現在まで存在する魯迅及び魯迅小説の問題について、新たに発見することができるであろう。

増田渉の直筆注釈メモは、増田本人の筆記習慣、魯迅との関係などいろいろ再現しているだろう。つまり、増田の注釈メモの内容が魯迅本人が承認しており、学術的な研究対象となり、非常に価値のある資料である考えられる。

二、「阿Q正伝」中の賭博に関する図解

1、賭博に関する図解の紹介

増田渉は魯迅の個人授業を受けた際に、文章の内容について言葉で説明するのが困難な箇所、小説の中に描かれている情景を絵で説明している場合も幾つかある。その中に、「阿Q正伝」にある賭博についての図解問題は注目すべき点だと考えられる。

図7の左側の余白に、文字以外に簡略化した図解で「阿Q正伝」にある中国の賭博の規則が表現されている。

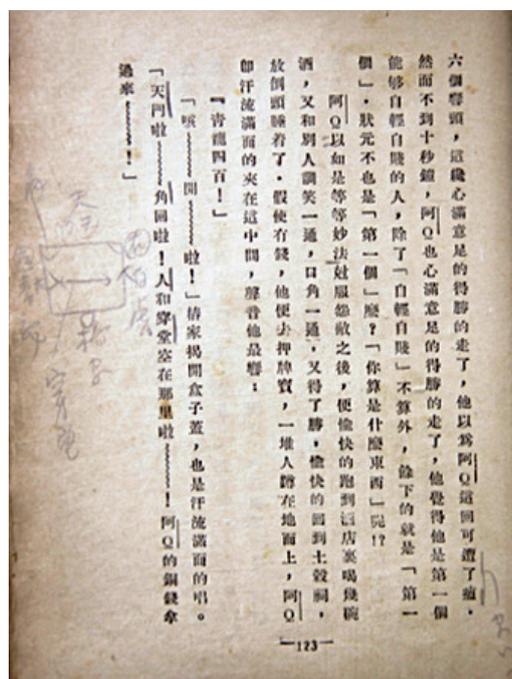


図7

ここの原文は阿Qが「押牌宝」という賭博をする様子である。

この図解は「椿（庄）家」「天門（天）」「左青龍（地）」「右白虎（人）」「穿堂」「角」、それぞれの位置を詳しく表記している。原文は、「阿Q即汗流滿面地夾在這中間，声音他最响：“青龍四百！”“咳……开……啦！”庄家揭开盒子盖，也是汗流滿面地唱：“天門啦，角回啦……人和穿堂空在那里啦……！阿Q的銅錢拿過來……！”」であり、1935年の『魯迅選集』に増田渉はこの部分を以下のように翻訳した。

阿Qは汗だくになってその真中に割り込んでゐる、彼の声は一番よく徹る。「青龍に四百張った！」「はいッー開けるぞ！」と壺元は壺を開ける、やっぱり汗だくで唱ふやうに、「天門だ一角は戻しだ！人と穿堂とは空っぽだ！—阿Qの銅錢、寄越しねえ」（注、天（或は天門）、地（或は青龍）、人（或は白虎）、角、穿堂、いづれも錢を張る位置の名）

注釈メモにある魯迅から教えられたこの図解を使って、増田は原作者の意思により忠実な翻訳をし、読者にわかりやすい訳注も入れることができた。

また、1971（昭和46）年2月に光生館から出版された香坂順一が注音や注釈した「阿Q正伝・注釈本」の前書きには、「この本の巻末についている注釈は1970年夏の専攻生と合宿で注釈ノートを底稿にしたもの。」と書いてある。そして、「事項注釈のいくつかのものについては関西大学増田渉教授にもご指教をうけた。」ということも書いてある。香坂順一のこの阿Qの賭博の場面にある「青龍」という言葉については以下のように注釈している。

3行「青龍」6行「天門」、「角」、「穿堂」ともにかけ金をはる場所。詳細は不明なるも、増田渉氏の教示によると魯迅は同氏につきのように説明したという。青龍一壺元に向って右、天門一同じく向い側、角一同じく左右のすみ、人一同じく左側、穿堂一まんなか。また、一説に“青龍”は清朝時代の銅貨の別名、したがって、“青龍”で四百文となる。また“角回啦”（角はかけ金をもどす）ではなく“角回”という場所、同じく“人和”も一つの場所であるともいう。ここでは増田氏の教示に従う⁴⁾。

この阿Q賭博の場面に現れる言葉についての注釈には、増田渉から教えられた話が載せられている。香坂順一の注釈は非常に詳しく、増田の教示にしたがって、原作者である魯迅の意志を受け継いでいる。増田渉は自分と恩師魯迅から教えられたことを他の学者に教えた。前述によって、香坂は合宿で自分の専攻生と「阿Q正伝」を読みながら、問題を見出し、いろいろまとめあげたのが、この注釈本である⁵⁾。香坂はまた増田と魯迅の親しい師弟関係を受け継ぎ、増田が魯迅から教えられたことを自分の専攻生に教えた。

魯迅は非常に賭博のことを詳しくわかるように生き生きと書いている。「阿Q正伝」に書かれている賭博の規則などは、一般の中国人にわからないものであり、無論日本人である増田も知らなかったはずである。よって、これは魯迅から教えられたものであると考えられる。魯迅は賭博を全くしなかったが、一般の中国人が知らない賭博の規則を詳しく知っていたのには、以下のような要因があるという説がある。

当時、魯迅は「阿Q正伝」を創作していた際にこの賭博についての場面をより現実に近い形で表現したいと考え、市井に交わるために、一般の労働者であり、賭博に詳しい王鶴照という人物に弟子入りしたことがあった。王昊軍（2003）によると、「王鶴照对于市井平民的生活非常熟悉，他也懂得賭博場上的押牌宝、搓麻将、玩竹牌的方法以及賭場上賭徒們的規矩和場面。他把自己所知道的賭博中的所有東西都津津有味講給魯迅听，還給魯迅哼唱了賭博時唱的歌謠。魯迅像一个小学生听老師講課一樣，他一邊認真听，一邊用笔做筆記，還認真地提問題。（王鶴照は市井の一般人の生活に非常に詳しく、賭博場の押牌宝、搓麻将、玩竹牌などの方法及びばくち打ちたちの規則もよく知っている。彼は自分がしていた賭博

4) 魯迅著・香坂順一注釈、『阿Q正伝・注釈本』（光生館、1971年2月）。

5) 同4)

のルールなど全てを全部のものも快く魯迅に教えて、賭博の歌謡も歌った。魯迅は小学生のように、真面目に聞き、メモし、真剣に質問したりする。)』⁶⁾ ということを記載した。魯迅はおそらく王鶴照から賭博について教えられた時と同様に、詳しく増田に教えた。そして増田は、魯迅より指導を受けた内容をそのような図解で表現した。

しかし、周作人（周遐寿）が書いた『魯迅小説裏的人物』という本の中に、阿Q賭博の場面で、「庄家」が歌っている歌謡は正確ではない可能性があるという説もある。周作人はこう述べている。

曾有人説，本文中莊家所唱的話不太確當，者也正是可能的事，因為著者沒有機會親身去看過。只是在看社戲或從戲台下走過的時候，耳朵里聽見他們抖抖的沙啞的唱聲而已。本文中所說的唱詞或者不是牌寶所用的也未可知，或者是牌九所用的麼？我也全是茫然，這裡只有靜候高明的指教了。（本文中の“庄家”のうたう文句は“牌寶”のときにうたうものではない。魯迅は直接みる機会がなかったから、耳にのこっているうたの文句を用いたのだろうとも言っている。）⁷⁾

先述の香坂順一の注釈本にも以上の周作人の話を引用した。筆者が調べたところ、「押牌宝」または「押宝」という賭博用語の最初の出处は、清の時代、叶廷瑄が書いた『吹網録・旧五代史楊凝式伝注証』の中の、「薛史在乾隆中、館臣从『永楽大典』纂出所存伝文、尚有四百餘言、然亦无諫父押事。」という文章である。「押牌宝」の規則を簡単にいうと、宝の方向を当てさせることである。詳しい規則は地方によるそれぞれが少し異なっており、魯迅が書いた規則は魯迅しかわからないであろう。周作人は魯迅と不仲になったのは1922年前後だと考えられ、「阿Q正伝」の作成は1921年12月、周作人は魯迅が「阿Q正伝」のために王鶴照という人物と交流したことを知らなかった可能性もある。しかも、周作人本人も「押牌宝」の規則に全く詳しくないと『魯迅小説裏的人物』に書いてあるため、周作人の話の信憑性は高くないと考えられる。

2、魯迅が書いた賭博の解説図の他版本

実際に、魯迅は弟子である増田渉にこの賭博の規則を教えたのみならず、「阿Q正伝」を翻訳したことがある山上正義や井上紅梅にも同様な図解で説明したことがある。さらに、魯迅が最初に賭博に関する図解を描いたのは1925年、ロシア人ワシリーエフ（Борис Александрович Васильев、中国語名：王希礼）に送った手紙にある。いわば、増田渉の注釈版本を含めて、この賭博の解説図は4つの版本がある。

まずは1枚目、ワシリーエフに送ったものである。前述によって、ロシア人 Борис Александрович Васильев (1899-1937)、中国語の名前は「王希礼」であり、北伐戦争時期に、駐開封国民革命軍の顧問として中国に長く滞在していた。1925年、魯迅の作品を翻訳しようと考え始めた。戈宝権 (1976) によると、その際、「阿Q正伝」に書いてある賭博に関するところに理解できなかったため、曹靖華を通じて、魯迅と次のように書簡での連絡ができた。

6) 王吳軍、「魯迅為何明白賭博之道」(『羊城晚報』、2003年8月)。

7) 周作人、『魯迅小説裏的人物』(上海出版公司、1954年)。

曹靖華同志曾經告訴我，當蘇聯人瓦西里耶夫（中名王希禮）1925年在開封着手翻譯《阿Q正傳》時，曾請他寫信給魯迅先生（這是他們通信的開始），詢問有關賭博用語的問題。魯迅先生曾專就賭博畫了一張圖，說明“天門”、“角回”等的位置及如何賭法，這大概是魯迅先生就賭博問題所畫的第一張圖。曹靖華同志年初離開河南去廣州參加北伐時，把這些最初的信件寄存在友人家中，由於當時的白色恐怖，代存的人把它們全燒了，因此魯迅先生親筆畫的第一張賭博圖也就沒有被保存下來。（參看曹靖華著《春城飛花》第26-29頁，第135-140頁）⁸⁾

以上の記述によって、戈宝権は曹靖華から直接に魯迅がワシリーエフのためにはじめて「阿Q正伝」にある賭博について図解を書いたことを聞いた。ただし、当時広州の「白色恐怖」の原因で、曹靖華が友人宅に預かった魯迅の図解が燃やされた。それ故、このワシリーエフへの1枚目の図解は保存できなかったということである。

次は、魯迅が山上正義への手紙に描いた2枚目の図解である。山上正義は魯迅の作品について、「阿Q正伝」一篇のみ翻訳した。魯迅の日記によると、この山上訳『支那小説集・阿Q正伝』は最初の魯迅自らが校閲した日本語の訳本である。また、1931年3月3日、山上正義宛の書簡の別紙は「阿Q正伝」について魯迅自らが注釈85箇所をつけたものたである。珍しく、その注釈が非常に詳しいと認められる。さらに、この部分の賭博の規則を説明するために、魯迅は増田渉のメモと同じような図解を書簡の別紙に書いていた。図解以外に、簡単な解説「角及び穿堂に掛ける人は両側の勝負と同じ事になる。若し両側一勝一負ならば、角及び穿堂は勝負なし」も書いてある。（図8）

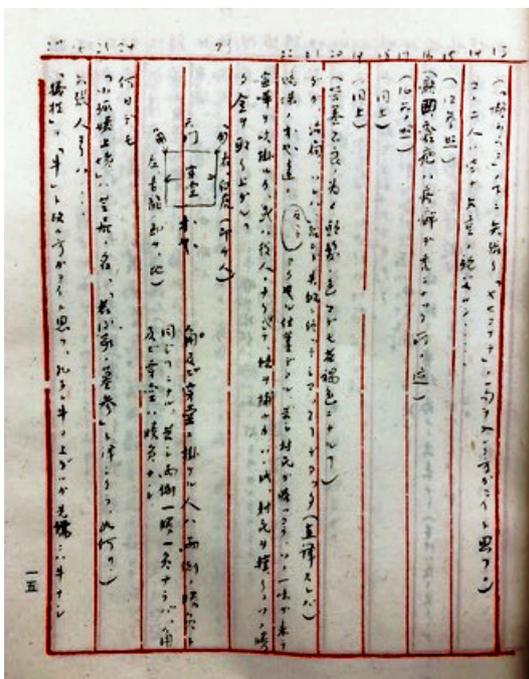


図8

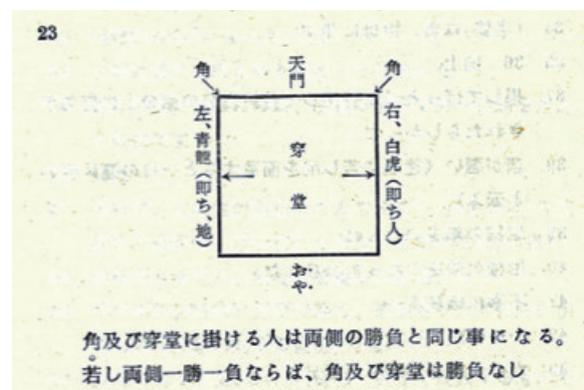


図9

8) 戈宝権、「対魯迅校訂の日記本『阿Q正伝』以及他与編訳者の交往の補正」（山東師院学報、1976年）。

3枚目は、井上紅梅が所有していた版本である（図10）。1932年11月、井上紅梅訳の『魯迅全集』は改造社から出版された。この版本の扉に、魯迅の写真及び井上紅梅宛の「阿Q正伝」中の賭博の図解が載せられている。この図解と魯迅の解説は雲模様紙に書いており、前述の2つの版本の内容と一致し、3つの版本の中で最も詳細である。隣に、「最近の魯迅氏と、特に記者に与へた「阿Q正伝」中の賭博の解説図」と書かれている井上の説明があり、それによって、井上は魯迅と直接な書簡往復をしたことがあると考えられる。

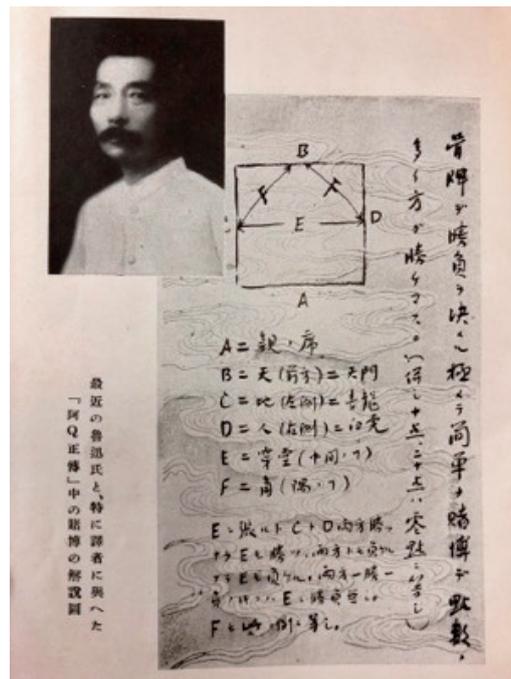


図10

また、井上訳の『魯迅全集』に載せられているこの版本の図解は、1937年に改造社から出版された増田渉が編集および翻訳に参加した『大魯迅全集』の扉頁にも載せてある。図11によると、この図解の左上の少し欠けた箇所、「阿Q正伝」中の賭博の解説図（魯迅筆）」と記載されている。この図解の欠けている箇所は図10の魯迅の写真が載せている部分であろう。つまり、『大魯迅全集』はそのまま同じ図解を引用している。この解説図が書かれた正確な時期は確認できないが、魯迅本人の筆跡で間違いなさであろう。

ちょっと開けて見ると其誤訳の多に驚きました。」と、魯迅は井上訳に不満を持っていた。また、1933年6月22日の日記に、「井上紅梅見贈海苔一合。」ということも記載しており、当時の詳しい状況は不明になっている。1933年6月25日、魯迅は山本初枝宛の書簡に、「井上紅梅様が上海へきました。もう頗る酒を飲んでる様です。」と言及していた。

以上の魯迅の日記または書簡から見ると、魯迅は井上に会った事もあり、全く連絡を取っていないわけではない。その上、『魯迅全集』が出版された後すぐに送ることができたことは、おそらく、井上紅梅は『魯迅全集』を魯迅に贈る前から、多々交流があり、魯迅の住所を知っていた可能性が高いだろう。『魯迅全集』の書末に「魯迅年譜」も付録されており、「魯迅氏の希望に依り」ということも書いてあるため、井上は魯迅の作品を翻訳した際に、魯迅との交流は存在するだろう。ただし、魯迅は増田渉や山本初枝宛の書簡の内容を確認すると、魯迅は井上に「井上紅梅氏に拙作が訳された事は僕にも意外の感がありました。同氏と僕とは道がちがいます。」という評価もある。原作者である魯迅は井上訳に対して、非常に不満を持っていたと同時に、井上のことにもあまり好感を持っていない。それ故、井上と書簡往復したことがある可能性は高いが、魯迅は個人的な原因でそれらの書簡を保存していなかったかもしれないだろう。

以上の調査によって、『魯迅全集』が出版された前に、すなわち1932年頃、賭博解説図を含む魯迅と井上紅梅の往復書簡は存在する可能性が高いが、公開されてはいないため、また検討する必要がある。

増田渉の注釈メモをはじめ、「阿Q正伝」中の賭博の規則についての4つの版本の図解を紹介した。保存されていなかったワシリーエフへの1枚目以外、残りの3つの図解の描かれた時期は大体同じ1931か1932年頃、山上正義や井上紅梅宛の版本は魯迅本人が書いたものであり、増田渉の注釈メモにあるのは増田が書いたのだが、内容は一致している。

三、「故郷」に現れた「鬼見怕」と「観音手」の正体

先述したように、増田渉は小説の不明なところを簡単な絵で解説した場合がある。「故郷」一文の中に、閩土の話によって「鬼見怕」と「観音手」という貝が存在しており、増田はその2つの貝について絵で解説している。

この2つの言葉に関する原文は「我們日裏到海邊撿貝殼去，紅的綠的都有，鬼見怕也有，観音手也有，…」とある。魯迅の小説「故郷」に見える「鬼見怕」と「観音手」は貝の学名ではないため、現在の学界では具体的に相応する確実な貝の種類は考証できないと認めている。2005年、人民文学出版社から出版された最新版の『魯迅全集』には、「鬼見怕」と「観音手」が以下のように注釈されている。

鬼見怕和観音手，都是小貝殼的名稱。舊時浙江沿海的人把這種小貝殼用線串在一起，戴在孩子的手腕上或腳踝上，認為可以“辟邪”。這類名稱多是根據“辟邪”的意思取的。（「鬼見怕」と「観音手」、貝の名称である。昔の浙江沿海の人は、このような貝を糸で子供の手首や足首に結ぶと、厄除けのお守りとして使う慣習があった。これらの名称のほとんどは「厄除け」の意味によって付けら

れたのである。)¹²⁾

筆者の調べたところ、中国語の「藤壺」は俗称で「観音手」という場合もある。そして、この2つの名前は魯迅の故郷である紹興方言であり、貝の外見によってつけている名前である。また、紹興の特産の貝の総称で、「鬼見怕」及び「観音手」両方とも同じ種類の貝という説もある。

BCC 語料庫で調査すると、魯迅の小説「故郷」または「故郷」の内容を引用する文章以外、「鬼見怕」という言葉は周作人の散文「鬼与清規則戒律」の中に現れた。「此外如一种小貝殼称作“鬼螺螄”，又日本の子安貝，地方上俗名“鬼見怕”，大概因為様子古怪的緣故，又因了這個名称，却相信它真可以有辟邪的功用。」¹³⁾。「観音手」という言葉を貝の名前として使っている場合は魯迅の小説「故郷」のみである。

よって、「故郷」の中に現れた「鬼見怕」と「観音手」の正体は何であろうか、「観音手」実は「藤壺」であろうか、また、両方は同じ種類の貝であろうか、という問題を増田渉の注釈メモを参考にして検討する。

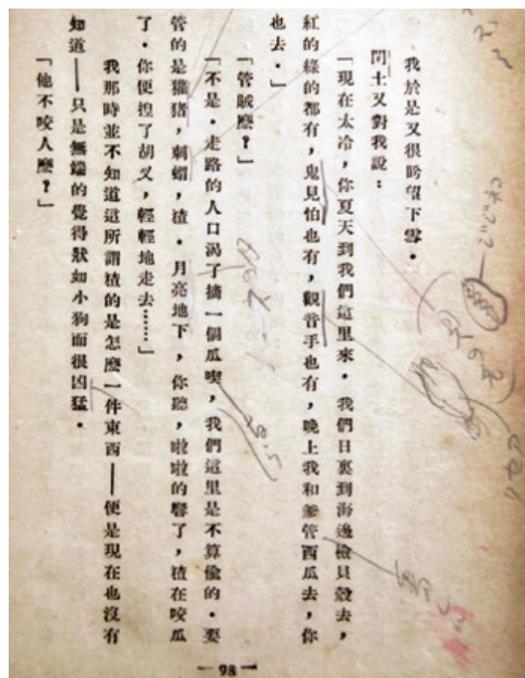


図12

図12の右側の増田渉の注釈メモのように、この2つの言葉は「貝の名」である。さらに、増田はこの2つの種類の貝を絵で表現しており、「鬼見怕」の絵の上に日本語で「ジジネコ」と標記し、「観音手」の隣に「アセリ」と標記している。おそらく、魯迅の個人指導を受けた際に、増田は魯迅のこの2種類の貝の形についての説明を聞き、その説明によって一体どの貝か理解してから、「鬼見怕」と「観音手」

12) 魯迅著、『魯迅全集』（人民文学出版社、2005年）。

13) 周作人著、『周作人散文全集』（広西師範大学出版社、2009年）。

の絵が描かれた。いわば、「鬼見怕」と「観音手」は異なる種類の貝であることが明確にされた。一方、「ジジネコ」も「アセリ」も実は島根県の方言である。島根県八束郡恵曇村（現在の松江市鹿島町）生まれの増田渉は魯迅が紹興の方言で、幼い頃の記憶の中に閩土から教えてもらった貝を表現することと同じように、自分の島根県の方言を使って注釈している¹⁴⁾。

表1：島根の魚：標準和名から地方名の検索（魚類以外の生物）

標準和名	県東部	県西部	隠岐
カメノテ	アセコセ、アセリ	セイ、セー、タカノツメ、トリノエボシ	アサリ、シーシャリ、シラサリ
タカラガイ		ネコガイ	

以上の表によると、島根県の方言で「アセリ」というものの学名は「カメノテ」である。「カメノテ」（亀の手）とは、岩礁海岸の固着動物であり、今まで確認されたカメノテ属唯一の種である。よって、図14のよう、増田渉が描いた「観音手」の絵と実際の「アセリ」、いわゆる「カメノテ」とを比べると、同じものだと考えられる。そして、「カメノテ」の中国語名は「藤壺」であるため、「観音手」実は「藤壺」ということが検証できた。



図13



図14

また、「ジジネコ」という名前と完全に一致するのではないが、島根県の方言の中に「ジジネコ」と似ている「ネコガイ」という貝が存在する。表1を参照すると、「ネコガイ」というものの学名は「タカラガイ」である。「タカラガイ」（寶貝）はタカラガイ科のに属する巻貝の総称である。さらに、先述したように、「鬼見怕」という言葉は周作人の散文「鬼与清規則戒律」の中に現れる。その原文は、「此外如一种小貝殼称作“鬼螺蛳”，又日本の子安貝，地方上俗名“鬼見怕”，…」とある。以上の原文から見て、周作人は「鬼見怕」という貝と日本の「子安貝」（コヤスガイ）は同じものだと言及した。実は「子安貝」とは、タカラガイ科に属する巻き貝の俗称である。つまり、周作人の言っている「子安貝」も「タカラガイ」で、「ジジネコ」、「ネコガイ」、「子安貝」の学名は同じ「タカラガイ」であり、魯迅と周作人が書いている「鬼見怕」のことを指す。

「ネコガイ」の画像（図15）を調べると、増田渉が描いた「鬼見怕」、それに増田の注釈である「ジジネコ」、その3つは同じものだと認められる。

14) 島根県庁ホームページ。https://www.pref.shimane.lg.jp/industry/suisan/shinkou/umi_sakana/sakana/6/6-03.html



図15

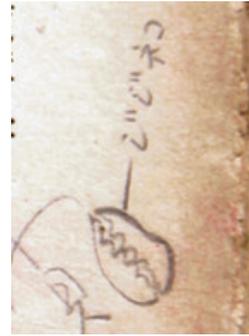


図16

しかし、角川文庫から出版された増田訳の「阿Q正伝」の中に、増田渉は「鬼見怕」を周作人の言い方と同様に日本語で「子安貝」、いわゆる注釈メモの「ジジネコ」の種類と一致する貝に翻訳していたが、「観音手」を「馬手貝」に翻訳した。「馬手貝」はまた別の種類の貝で、外見も注釈メモにある「観音手」の図解と異なっている。他の訳本と対照すると、

原文：鬼見怕也有，観音手也有，…

増田訳：子安貝もあれば、馬手貝もある。

井上紅梅訳：鬼が見て恐れるのや、観音様の手もあります。

佐藤春夫訳：「鬼おそれ」もあるし、「観音様の手」もあるし、…

竹内好訳：「鬼おどし」もあるし、「観音さまの手」もあるよ。

松枝茂夫訳：「おばけおどし」もあるし、「観音の手」もあるぜ。

高橋和巳訳：おばけ貝も、観音手貝もいる。

以上の各訳から見ると、どの翻訳者も「鬼見怕」と「観音手」をそのまま字面の意味で直訳している。おそらく、誰も実際的な貝の名前が不明のため、日本語名で翻訳することができなかったのだろう。増田渉の注釈メモには明確に描いてあるので、具体的にどのような貝か、日本語名で翻訳できた。前述によって、注釈メモを参考にした上、「観音手」実際は「カメノテ」ということは間違いないと考えられるが、増田が「馬手貝」と翻訳した原因は、おそらく、最初の「故郷」の増田渉訳は1960年に出版され、魯迅の個人指導を受けたのは1931年であり、おおよそ30年ぶり、増田の記憶も不鮮明になっていたことであろう。当時の注釈メモを見て、「鬼見怕」は「子安貝」であることを確信したが、「観音手」に対する疑問を抱いており、結局「馬手貝」という誤って訳したのではないか。

以上の調査によって、現在まで解決できなかった「故郷」に登場する「鬼見怕」と「観音手」は実際どのような貝か、という問題は明らかになった。増田渉の注釈メモは魯迅の個人指導を受けた際に、魯迅の説明に基づいて書かれているため、増田が描いたこの異なる2種類の貝の正体は魯迅本人が承認していたものであろう。しかし、増田本人はなぜ翻訳する際に、このメモを参考にしていなかったか、まだ検討する余地があるだろう。

おわりに

本論では、増田渉が魯迅の個人指導を受けた際に残された注釈メモの中の図解を紹介した上で、魯迅本人が「阿Q正伝」中に書いてある賭博の規則について図解で説明した。その図解は以下の4つのバージョンが存在している。

a、1925年、ロシア人であるワシリーエフ（Борис Александрович Васильев、王希礼）は「阿Q正伝」をロシア語に翻訳する際に、魯迅が彼に送った手紙に賭博を説明する図解を添付していた。しかし、このバージョンは保存されなかった。

b、1931年3月3日、山上正義宛の書簡の別紙に魯迅が「阿Q正伝」についての注釈をつけ、その中に賭博を説明する図解があった。

c、1931年か1932年頃、魯迅が井上紅梅に賭博の図解を送ったことがあると推測できる。このバージョンの図解は井上紅梅訳の『魯迅全集』の扉に載せられている。

d、1931年、増田渉は上海で魯迅の個人講義を受けた際に、魯迅の説明を聞き、増田が直接教科書として使った北新書局版『呐喊』に賭博の図解を書いた。

以上のa、b、c、3つのバージョンは魯迅本人が書いたものであり、dは増田渉が書いたのだが、内容は一致している。今までの研究では、魯迅が山上正義に宛てた書簡に添付していたバージョンが最も知られている。本論文では増田渉の直筆注釈本にある賭博の図解が存在していることを紹介した。さらに、ワシリーエフ宛てや井上紅梅宛ての手紙に書いた図解は今までの研究で言及されたことはあるが、増田渉の注釈メモにある図解と一緒に比較したことは、本論文が初めてである。

また、「故郷」の中の「鬼見怕」と「観音手」の正体を明らかにした。増田渉は注釈メモに「鬼見怕」と「観音手」を図解の形式で注釈している。このような特別な物体について、文字のみの注釈より、図解を加えたほうがさらに信憑性が高くなる。そのため、「観音手」は実は「カメノテ」、いわゆる中国語での「藤壺」であり、「鬼見怕」は「タカラガイ（宝貝）」であることがわかった。研究者の角度から考えると、増田渉が書いた「ジジネコ」と「アセリ」のような文字のみの注釈では、方言の関係で十分確定することができない。この場合は、図解を加えたメモのほうがさらに信憑性が高くなっていると考えられる。

以上の論述は、現在までの魯迅研究に対する新たな参考、あるいは「故郷」の内容に関する補充になり得るという点で、意義があると考えられる。この増田渉の直筆注釈メモは、魯迅研究に非常に貴重な情報や見解を提供できると考えられる。